様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８０６９８

研究課題名（和文）薬物依存者の「社会復帰」に関するミクロ社会学的研究

研究課題名（英文）A Micro-sociological Study of "Rehabilitation" of Drug Addicts

研究代表者
南　保輔（Minami, Yasusuke）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：１０２６６２０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　薬物依存からの自助回復組織ダルクにおいて調査を行い，11人のダルクスタッフの「回復」について明らかにした。スタッフとなった経緯もその経歴もさまざまだったが，スタッフ業務経験がスタッフ自身の「回復」に生かされていた。スタッフ業務は，利用者のサポートと施設運営とからなる。利用者サポートが基本であり，これを通じて得られるスタッフとしての学びも手応えも大きなものであった。スタッフも薬物再使用の危機に見舞われるが，ミーティング出席やステップ学習という基本を活用して乗り切っていた。ダルクスタッフは，薬物依存者の「社会復帰」のひとつのかたちとなっていた。

研究成果の概要（英文）：We conducted research at two DARCs (Drug Addiction Rehabilitation Centers), which are self-help institutions of drug addicts. Eleven people of the staff were interviewed more than three times. When they became staff, some people had definite aspirations to become staff while the others became staff because their respective institutions were understaffed at the time. Staff jobs consist mainly of supporting customers and managing the institutions. Job experiences as staff helped their own "recovery" from drug addiction. Supporting customers provided lessons and satisfaction to the staff people. When they felt graving for drugs, they attended meetings, read the "basic text," and practiced 12 steps.

研究分野：コミュニケーション論

キーワード：薬物依存者　社会復帰　ダルクスタッフ　回復　ライフヒストリー

１．研究開始当初の背景

薬物依存症者の「回復」について，社会学の立場からのアプローチのひとつがダルク研究会によるものだった。薬物依存からの自助回復組織ダルク利用者を対象とした研究で，「回復」初期の状況が明らかにされた。ダルク利用者のほとんどが 30 歳代以上であり，薬物依存が深刻な状況となってから利用を開始していた。刑務所経験があるひとも少なくなかった。

ダルク入寮中は薬物の再使用も見られたが，それも「回復」の重要な契機となっていた。薬物依存からの回復には，断薬と「スピリチュアルな成長」とが必要とされている。入寮が１年をすぎると仕事を始め，２年をすぎ退寮し一人暮らしをするという流れができていた。ダルク利用者の多くは，断薬をたしかなものとして，「スピリチュアルな成長」に取り組んでいた。

２．研究の目的

薬物依存からの「回復」は大きく初期・中期・後期の３期に分かれる。初期において依存者は，ダルクに入寮・通所しながら断薬継続に取り組む。中期は，ダルクから退寮し，社会内での自立生活を目指す移行期間であり、後期においては一生涯にわたる「回復」の継続に取り組むことになる。本研究において，初期に続く中・後期を「社会復帰」過程と捉え，依存者への継続的インタヴューや自立支援場面のミクロ社会学的考察を通してその全体像を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

大都市圏に位置するＸダルクとＹダルクを定期的に訪問し，スタッフと利用者のインタヴューを実施するとともに，ミーティングなどの活動を観察調査した。2013 年４月から 2017 年３月にかけて，調査チームのメンバーは，訪問日数合計で X ダルクに 54 日，Y ダルクに 31 日の訪問調査を行った。また，利用者とスタッフに対して合計で 148 回にのぼるインタヴューを実施した。

インタヴューはＩＣレコーダで録音し，文字起こしをして基本データとした。ミーティングなどのダルクでの活動は手書きメモを用いた観察とし，これをもとに「フィールドノーツ」を書き上げてデータとした。

ミーティングのほかに，特別な行事であるクリスマスパーティなども観察した。X ダルクと Y ダルクとの比較資料とするために，他地区にある３つのダルクを訪問し，観察と利用者インタヴューを実施した。また，薬物依存者の自助組織であるＮＡ（ナルコティクスアノニマス）の全国集会であるＮＡ日本リージョナルコンベンションを参観した。

４．研究成果

（１）スタッフとなった経緯と「回復」

スタッフ調査対象の 11 人の一覧を表１に示す。

11 人の（元）ダルクスタッフの所属は，Ｘダルクが 8 人，Ｙダルクが３人だった。Ｘダルクの１人は当初Ｙダルクにいたが，調査期間の途中でＸダルクに移動した。スタッフ歴で言うと，約 10 年超のヴェテランが 4 人，中堅が 2 人，調査期間中に新しくスタッフとなったひとが 3 人，そして，スタッフをやめてしまった１人と週に１回だけのボランティアスタッフ１人とに分かれる。

表１　スタッフ調査協力者の一覧

仮名	ダルクにつながることになった依存物質	2017 年 3 月末時点でのスタッフ歴	インタヴュー回数
A	覚せい剤	22 年	10 回
B	覚せい剤	22 年	3 回
C	咳止め薬	22 年	6 回
D	覚せい剤	9 年	19 回
E	アルコール	6 年	6 回
N	咳止め薬	6 年	2 回
F	覚せい剤	4 年	5 回
G	咳止め薬	4 年	4 回
H	咳止め薬	2 年	16 回
I	覚せい剤	-	6 回
J	覚せい剤	-	3 回

①依存の状況

薬物依存の状況については，スタッフとならなかった利用者と比べて，スタッフとなったひとたちに特別なところは見られなかった。依存物質は，覚せい剤と咳止め薬が多い。依存が引き起こす問題は深刻なものであったが，ダルク利用者の大半はそういった状況でダルクにつながっていた。

②スタッフとなった経緯

ダルクスタッフは，最初は無給のボランティアから始まる。生活保護を受給して入寮生活をしている状態で，スタッフの手伝いをするというかたちである。対照的に，ダルクの外で仕事を持って退寮し，しばらく自立生活をしたのちダルクスタッフになったというひともいた。

強い意欲と高い志をもってダルクスタッフとなったひとと，そうではなく「流れ」のなかでスタッフとなったひととに分けることができた。調査協力者 11 人のなかでは，5 人（D，E，F，G，I）が前者，残りの 6 人が後者にあたる。たとえば，Ｆさんは，社会での仕事経験が 3 年あった。だが，鬱となり仕事をやめてダルク通所をしているなか

で，支援してくれているスタッフの姿にあこがれをもちスタッフとなることを希望した。他方Hさんは，Yダルクのスタッフ１人が急にやめることになり，人手不足の状況で「スタッフ見習い」となった。Hさんは，沈静していた薬物への欲求が仕事探しのストレスのなかで再燃しこわくなるという経験があった。それで，新規入寮者のサポートを中心とする入寮生活を送っていたところ，施設長から手伝うように言われたという経緯である。

いずれにしても，スタッフとしてダルクにいるかぎり，薬物使用からは「守られて」いられるという感覚を持っていた。スタッフとなる意欲の強度にかかわらず，スタッフとなることが自身の「回復」を促進するだろうという見込みがあったということである。

③スタッフとしての「回復」経験

ダルクにつながる原因となった依存物質の使用が止まったあと，ほかの嗜癖がやめられない，あるいは問題化したひとは少なくない（セカンドアディクション）。タバコを吸うほかに，ギャンブルで生活費を使い果たし借金したという経験があるスタッフもいた。

ＮＡの活動には，ほとんどのスタッフが熱心に取り組んでいた。ただし，ヴェテランスタッフの場合は，スタッフ歴の初期に精力的に活動する期間があり，その後はミーティング参加中心になるというパタンが見られた。メンバーが世代交代していくＮＡという組織の特質を反映しているものと思われた。

12 ステップへの取り組みとしては，近年出版された『ステップワーキングガイド』が活用されていた。ＮＡのスポンサーなどとグループをつくり，これに取り組んでいるスタッフが多かった。ダルク入寮中はステップ１から３を繰り返し学ぶが，その後のステップ学習は各人にゆだねられる。

ＮＡミーティングには，ダルク利用者の参加も多く，ダルクスタッフが自身の悩み，とくに利用者との関係上の悩みを話すことははばかられる。そういった悩みを契機として，スタッフはステップとの取り組みを加速させるなどをして自身の「回復」と向き合っていた。

総じて，調査対象者 11 人は，１人をのぞいて，ダルクスタッフをしていることで薬物依存からの「回復」をうまく進めていた。スタッフをやめることになった１人は，薬物の再使用であるスリップを経験しながら，スタッフではない「回復」のかたちを模索しているところであった。

（２）業務とスタッフとしての成長

ダルクスタッフの業務は，利用者サポートと施設運営とに大別される。スタッフとなった当初，ミーティングの司会，電話対応，病院への付き添い，業務日誌記入とミーティング時の利用者の様子の記録，簡単な相談対応，イベント同行などを行う。

①若手スタッフＦさん

利用者からサポートする側となって，Ｆさんはスタッフの苦労を実感していた。利用者と接することで「昔の自分」を思いだしていた。かつての姿と比べることで，自身の成長を認識し「回復」を感じていた。相談では，相談者に感謝されることで，自身がスタッフとして役に立っているという手応えを得ていた。

Ｆさんは，スタッフ歴 2 年となるころに「ようやくスタートライン」に立ったと感じていた。「スタッフというおごり」を自戒し，スタッフ業務の「奥深さ」を感じていた。自身のスタッフ志望の要因となった「ラクそうに」生きているヴェテランスタッフに近づくべく，しばらくスタッフを続けようと考えていた。

②ヴェテランスタッフＡさん

スタッフ歴が 20 年を越えるＡさんがスタッフとなったのは，古参スタッフが相次いでやめるという状況下だった。Ｘダルクは新規事業を始めるところだったが，いっしょにスタッフとなった 3 人で分担してやっていくことにした。

結婚して子どもができるまでは，ＮＡ活動にも熱心に取り組んだ。夜のミーティングの場となるＮＡの充実は，ダルクの利用者にとってもその退寮者にとっても不可欠のことだった。

Ａさんは，行政の支援を得るために厚生大臣（当時）に陳情に行ったこともある。それでも，ダルクスタッフの仕事の基本はメンバーのサポートだと考えている。調子が悪くなった利用者の病院の付き添いに行くといったことを大切にしている。「回復」はいろいろなひとからのすこしずつの手助けによってなっていると考えているからである。

ヴェテランスタッフのＡさんだが，サポートしてきた数多くの利用者の事例を踏まえて，自身が「回復」できたことについて「タイミングが良かった」と考えている。12 ステッププログラムの教えにそった生き方を選択できるかどうかも，そのタイミングによるという考えである。

Ａさんは，Ｘダルクの施設長をしている。今後Ｘダルクを中心とする「回復」コミュニティを作りたいと考えている。退寮者が近くに住んで，気軽に遊びに来る。「泊まり」当番やミーティングの司会をしたりする。そのようなかたちで，「回復」の中・後期にある退寮者が前期にある利用者をサポートする。また，退寮者自身が「初心」を思いだす契機とする。これがＡさんが理想とするコミュニティの姿である。

（３）「ターニングポイント」づくり

のちにスタッフとなったＨさんの調査は，Ｈさんが Y ダルクに入寮した直後から継続的に行われた。Ｈさんは咳止め薬を万引きして使用していたが，捕まって裁判で労役とな

った。労役後Ｙダルクに戻り新規入寮者のサポートをしながら入寮生活を続けていた。Ｙダルクが人手不足となり見習いスタッフとなった。

Ｈさんは Ｙダルク入寮後も薬物使用をやめられなかったのだが，裁判の日を最後にとめることができた。労役経験が「ターニングポイント」となったかのように思われた。

10 数回のインタヴューにおいて，労役の意味づけは変遷した。当初は重視していなかったが，最後には「親身に接してくれたひと」のおかげで使用をとめることができたと言うようになった（表２）。

表２　労役と断薬についての語りの変遷

期	鍵となる表現
第１期	「こんなもんか」
第２期	「きっかけのひとつ」
第３期	「ほかにもたくさんあった」
第４期	「親身に接してくれたひと」

ダルクでの生活では，ミーティングに出席して話すことが中心である。その積み重ねが労役と断薬の意味づけの変化につながっていた。

Ｈさんの事例は，断薬と「スピリチュアルな成長」の具体例となるとともに，「ターニングポイント」が時間的に限られた時点の出来事ではなく，「プロセス」であるということも示すものであった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①南 保輔，ターニングポイントはポイントではなくプロセスである：薬物依存からの回復における「労役経験」，成城文藝，査読無，240 号，2017，（印刷中）.

②中村英代，2016，「ひとつの変数の最大化」を抑制する共同体としてのダルク—薬物依存からの回復支援施設の社会学的考察，社会学評論，査読有，66 巻，1 号，2016，498-515.

③南 保輔，ダルクスタッフとしての回復：薬物依存者の「社会復帰」のひとつのかたち，成城文藝，査読無，232 号，2015，74-47.
https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3681&item_no=1&page_id=13&block_id=17

④中村英代，2015，誰も責めないスタンスに立ちつつ，問題の所在を探りあてる—摂食障害・薬物依存へのナラティヴ・アプローチ，N：ナラティヴとケア，査読無，6 号，2015，34-40.

⑤南 保輔，断薬とスピリチュアルな成長：薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性，成城文藝，査読無，227 号，2014，62-42.
https://seijo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3663&item_no=1&page_id=13&block_id=17

〔学会発表〕（計 5 件）

①伊藤秀樹・平井秀幸，ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（１）——誰がダルクに満足しているのか，第 86 回日本社会学会大会，2013 年 10 月 12 日，慶應義塾大学三田キャンパス.

②平井秀幸・伊藤秀樹，ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（２）——手に入れる／手放される「回復」観，第 86 回日本社会学会大会，2013 年 10 月 12 日，慶應義塾大学三田キャンパス.

③森 一平，ダルクにおける『回復』の社会学的検討Ⅱ（３）——『回復』概念の運用ヴァリエーションと特殊性，第 86 回日本社会学会大会，2013 年 10 月 12 日，慶應義塾大学三田キャンパス.

④南 保輔，ダルクにおける『回復』の社会学的検討Ⅱ（４）:薬物依存者における『回復』調査の困難と日記，第 86 回日本社会学会大会，2013 年 10 月 12 日，慶應義塾大学三田キャンパス.

⑤中村英代，ダルクにおける『回復』の社会学的検討Ⅱ（６）—パネルインタビューからみる入寮者の変容，第 86 回日本社会学会大会，2013 年 10 月 12 日，慶應義塾大学三田キャンパス.

６．研究組織

（１）研究代表者
南 保輔（MINAMI YASUSUKE）
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：10266207

（２）研究分担者
平井 秀幸（HIRAI HIDEYUKI）
四天王寺大学・人文社会学部・准教授
研究者番号：00611360

中村 英代（NAKAMURA HIDEYO）
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：50635191

（３）連携研究者
森 一平（MORI IPPEI）
帝京大学・教育学部・講師
研究者番号：90600867